

平安朝文学における角筆使用二場面の解釈

——『篁物語』と『蜻蛉日記』の読解私見——

妹 尾 好 信

はじめに

角筆という筆記具が、我が国において、上代から近代の明治・大正期に至るまで、極めて長い期間に渡って、全国的な広がりをもって使用され続けていたことが、小林芳規本学名誉教授と、その門下やゆかりの研究者たちの調査によって次第に明らかにされてきた。

筆者も縁あつて、主に九州各地の図書館の角筆文献発掘調査に参加して、主に近世後期における角筆使用の実態にじかに触れることができ、なかなか刺激的な体験をした。かくも日常的に使われていたとおぼしき角筆だが、おそらくは鉛筆の出現と普及によって急速にその役割を失い、たちまちのうちに姿を消して忘れられていったようである。まさしく、角筆で書かれた文字が普通の状態では見えにくく、何も書かれていないかのごとくであるのと同じように、角筆そのものの存在も忘却されて、最初からなかったも同然になつてしまつていたのであつた。

しかしながら、角筆文献や角筆の遺物の発見に注意が向けられるようになる、各時代の文献の中にも、案外角筆の使用が窺われる記事が存在することがわかつてきた。それらの多くはすでに小林先生によって紹介され、検討を加えられているのだが、ここでは、平安朝和文における角筆使用場面として知られる『篁物語』と『蜻蛉日記』の例を取り上げて、その記事の解釈について若干の私見を提出してみたいと思う。

一 『篁物語』——「てふくみ」に書かれた恋歌

「角筆」の語が平安朝和文に実際に見えるのは、『篁物語』が唯一であるようだ。その冒頭近くに、「かくひち」という表記で二例見えている。冒頭から引用してみよう。

親の、いとよくかしづきける、人のむすめ、ありけり。女のするさえのかぎりしつくして、今は書読ませんとて、「博士にはむつまじからん人をせん」とて、異腹の子の、大学の衆にてありけり、異腹なりければ、うとくて、「あひ見ず」などありけれど、「知らぬ人よりは」とて、すだれ越しに、几帳たててぞ読ませける。この男、いとおかしきさまを見て、すこし馴れゆくまゝに、顔を見え物語などもして、文のてといふものを取らせたりけるを、見れば、かくひちして、一首をなん、書きたりける。

なかにゆく吉野の河はあせななん妹背の山を越えて見るべ

く(篁)

とありければ、「かゝりける」と心づかいしけれど、「なざげなくやは」とて、

妹背山かげだに見えてやみぬべく吉野の河は濁れとぞ思ふ

(妹)

また、男、

濁る瀬はしばばかりぞ水しあらは澄みなむとこそ頼み渡

らめ(篁)

女、

淵瀬をばいかに知りてか渡らむと心を先に人の言ふらん

(妹)

男、

身のならむ淵瀬も知らず妹背川降り立ちぬべきこゝちのみ

して(篁)

かく言ふ程に、人にくからぬ世なれば、いとけうとくなかりけり。

(中略)

さて、あしたに、久しく書読ませざりければ、父ぬし、「あやしく篁が見えぬかな」と言ひて、呼びにやるに、男来て、れいの、書かき集めて教へけるまゝになん、この女のみ心に入りて、ひがごとをのみなむ、しける。かう教ふる中に、かくひちして、「かやう、初の書は、ひがごとつかうまつらん。この

ころは、物覚えすぞや。

君ぞのみ思ふ心は忘れず契りしこともまどふ心か(篁)

返し、

博士とはいから頼まむ人知れずもの忘れする人の心を(妹)

又、男、

読み聞きてよろづの書は忘るとも君ひとりをば思ひもたら

ん(篁)

かくて、この男は、てふくみをぞ、常に作りかへける。

(日本古典文学大系)による。傍線・詠者名等は私に付した

異腹の妹に漢籍を教える家庭教師役を親から命じられた篁は、藤越しに几帳を立てて対面し、教えていたが、最初は疎遠であった妹も次第に馴れていくに従つて顔を見せ、話もするようになった。そんな時、篁が「文のてといふものを取らせたりける」のを妹が見ると、そこには「かくひち」を使って恋心を訴える歌が一首書かれていた。

「文のて」とは「書の点」で、漢籍の訓み方を示した点図のことと見るのが通説である。引用文の底本である彰考館本には「文のてといふもの」とあるが、もうひとつの伝本の書陵部本には「ふみのちりきミカイいふ物」とある。書陵部本は「てと」を「ちり」と誤写したものである。また、彰考館本の「二首を」の部分は書陵部本では「哥を」とある。こちらは逆に彰考館本が「哥」の字を「一首」と誤写したのでらうと思うが、それでも文意は通じる。「文のてといふものを取らせたりける」とは、篁が教授に必要な点図を妹に受け取らせたといいこ

とて、その点図に歌が書かれていたというのである。篁が恋情を訴え、妹が拒むという内容の歌が応酬されるが、何しろ「人にくからぬ世」なので、二人は「けうとくなく」なつたという。

ここで最初の一首が「かくひち」すなわち角筆で書かれていたのであるから、当然それに対する妹の返歌も、また次の篁の歌もすべて角筆で書かれたに相違ない。そして、それらはやはり「文のて」（点図）に書き付けられたものであろう。篁と妹は、漢籍教授の場で、字を指し示したり訓点を書き付けたりするのに用いる角筆を使つて恋歌のやりとりを続けていたわけで、それは他人に知られるのを防ぐためにはまことに好都合であつたが、おそらく二人は普通には見えにくい角筆文字を読むために、点図を灯にかざしたり斜めに覗き込んだりしながら読み合つたものと思われる。これでは学問に身が入るはずがない。

案の定、後半では、篁は妹のことで頭が一杯になり、間違ひばかりしでかすようになる。そこでまた篁は「かくひちして」恋心の感ひゆえ間違ひをしよう旨を妹に訴える。そしてまた妹との贈答が繰り返される。これらも角筆で書かれたものであろう。その結果、「この男は、てふくみをぞ、常に作りかへける」仕儀となつた。

「てふくみ」には、彰考館本・書陵部本とも異同がない（書陵部本に「このおとこいてふくみを」とあるのは、「このおとこは……」を誤写したものと考えられる）が、難解な語である。遠藤嘉基氏が、「てふくみ」の誤写と見て、『文選』に見える文体の名である「弔文」の

こととし、「自分の思いのとげられない」ことを、篁は弔文に託して作りかえていたのではなからうか」と述べられて（日本古典文学大系「補注」以来、諸注多くそれに従つてきた（平林文雄氏『小野篁集・篁物語の研究』（昭63 和泉書院）・平野由紀子氏『小野篁集全釈』（昭63 風間書房）など）。

ところが、小林芳規先生は、この「てふくみ」の解釈について、注目すべき新説を提出された（「かくひち」と「文のて」——篁物語の成立時期についての「材料」『汲古』第11号（昭62・6））。先生は、『小右記』（弘本）長和四年（一〇一五）十二月四日の敦良親王読書始の条に、

今日先朝第三皇子書始也、（中略）前立黒漆案、敷幣置御注孝經并點袋、（大日本古記録）による。傍点引用者）

とある記事を紹介し、「点袋」なる語の存在に着目された。そして、中田祝夫氏が「点袋」とはいわゆる「点図草子」のことであるとされたのを承けて、

変体仮名の「ろ」と「み」の字形の近似からすれば、「てふくみ」は「てふくろ」の誤写の可能性が大きい。「て」は「て」（舌内撥音の無表記と見得るから、「点袋」と考えられて来る。そうとすれば、篁が「かくひち」で恋文を書いた「文のて」も、この「点袋」に対応するものであり、正に「点図」を指すという所に落ち着くことになる。

と述べられた。「文のて」は「点袋」のことで、すなわち「点図」である

うとされたのである。そしてさらに、

尚、「てふくみ」が「てふくろ」(点袋とすれば、「点袋」とは、点図を書いた料紙を二つ折にして袋綴にした草子の意ではないか。「てふくろ」を「作りかへける」とは、点図のヨコト点の形式を変更するのではなく、このヨコト点図を書き記した袋綴の草子を、新しい料紙にその点図を書き記して、造り直したことをいうのであろう。何故なら、この点図草子の余白には角筆で恋歌が書かれたからである。「常に作りかへける」とは、「かくひち」で恋歌や恋文を書くことが、漢籍を教える際には常時行われていたことを暗示するものであって、冒頭文に記された二度だけでないことを物語っている。作者の心にくい表現上の気配りが伝わって来るようである。

と説かれて、「てふくみをぞ、常に作りかへける」という記述に関してまことに明快な解釈を示されたのである。先に想定したように、篁と妹は角筆を使って恋歌の贈答を繰り返していた。そしてそれはいつも「文のて」に書かれていた。従って、「文のて」は、たちまち角筆で書かれた恋歌だらけになってしまうので、「常に作りかへ」る必要が生じたのである。

ただ、「てふくみ」が「てふくろ」(点袋の誤写であることは間違いないと思うが、「点袋」を「点図を書いた料紙を二つ折にして袋綴にした草子の意ではないか」というのはどうかという気がしないでもない。むしろ、「点袋」とは点図を入れる袋を指すと考えた方が自然

ではないかと思う。袋綴にした草子を「袋」と称することは、藤原清輔の歌学書「袋草紙」が、下巻巻頭(二部の伝本では上巻末尾)に書名の由来を四つ挙げた中の第一に「一者 其形囊也」とあって、本の形態が袋綴であったゆえと理解されていることから推測される。しかしながら、第三には「二者 動納囊随身也」ともあって、袋に入れて持ち運ぶゆえとも言っている。それと同じように点図も保護のためまた携行の便のために紙製の袋に入れるのが常であったのではないだろうか。篁は最初は「文のて」すなわち点図に角筆で恋歌を書き付けたのであったが、さすがに点図そのものに書き付けることはよくないと判断し、後には点図を入れる袋である「点袋」に書き付けるようにした。それは点図を傷つけるのを避ける他に、その方が和歌を書くべき余白が広がったからでもあるだろう。そして、妹も同じく「点袋」に返歌を書いた。たちまち「点袋」は角筆の恋歌でいっぱいになる。常に作り替えなければならない道理である。もちろん点図そのものよりも作り替えが容易なことも「点袋」に書いた理由であろう。さして根拠があるわけではないが、あえて試解を提出してみた。

それにしても、小林先生の論文を参考文献に掲げながら、平林文雄・平野由紀子両氏の本では「てふくみ」イコール「点袋」説について言及されていない。刊行時期から言って取り入れることができなかつたのであろうが、これからは当然顧みられなければならない説であると思う。

二 『蜻蛉日記』——「ものの先」で書いた歌

次は、おそらくは『篁物語』よりも早く、十世紀後半に書かれた『蜻蛉日記』の記事である。下巻、天禄三年(九七二)八月の条。十八歳の道綱は、四月中旬頃知足院からの帰途に偶然見染めた「大和だつ人」との文通を続けていた。月末頃、次のような一連の贈答が行なわれた。

大夫、例のところに文やる。さきざきの返りごとども、みづからのは見えざりければ、恨みなどして、

夕されのねやのつまづまながむれば手づからのみぞ蜘蛛もかきける (A・道綱)

とあるを、いかが思ひけむ、白い紙にものの先して書きたり。

蜘蛛のかくいとぞあやしき風吹けば空に乱るるものと知る
知る (B・大和だつ人)

たちかへり、

つゆにても命かけたる蜘蛛のいにあらし風をば誰か防かむ

(C・道綱)

「暗し」とて、返りごとなし。またの日、昨日の白紙思ひ出でてにやあらむ、かく言ふめり。

たちまのやくぐひの跡を今日見れば雪の白浜白くては見し

(D・道綱)

とてやりたるを、「ものへなむ」とて、返りごとなし。

(新編日本古典文学全集)による。記号・詠者名等は私に注記)

道綱は、これまでに届いた女の返歌がいずれも自筆とは見えなかつたので、恨み言を言つてAの歌を贈つた。夕方の寝室の端々を眺めていると、蜘蛛だつて自ら巣を作っていますよ。「つまづま」に「端」と「妻」を掛け、「かきける」に蜘蛛が巣を作る意の「かく」と「書く」を掛けて、どこの妻だつて自分で返事を書いているというのに、あなたはどうして代筆の手紙しか下さらないのでしょうか、と言つている。すると、何を思ったのか、女からは、白い紙に「ものの先」で書かれた歌が返された。蜘蛛の巣がく糸というのはとても奇妙です、風が吹いたら空中に乱れ散つてしまうことを知りながら、熱心にかくのすから。不用意に自分で返事をして、あちこちに散らされて浮名が立つてはかきませんわ、というのである。

この「ものの先」が、角筆を指すと考えられる。諸注、『篁物語』の「かくひちして、一首をなん、書きたりける」を引用して説くことが多いが、その解釈はさまざまである。戦後に流布した主な注釈書の見解を列挙してみる。「日本古典文学大系」(川口久雄氏 昭32 岩波書店)は「白紙に楊子のような物の先で書く」と注する。「日本古典全書」(喜多義勇氏 新訂版昭44 朝日新聞社)では「木片のさきを細く削つて焼いたもの」とする。「日本古典文学全集」(木村正中・伊牟田経久氏 昭48 小学館)では訳文でも頭注でも「先のとがつたもの」とするのみ。「講談社文庫」(川瀬一馬氏 昭55 講談社)でも「何かの先きで」と訳し、「講談社学術文庫」(上村悦子氏

昭53 講談社)でも「何かの尖端で」と訳して「先のとがったもの」と注している。「新潮日本古典集成」(大養廉氏 昭57 新潮社)も「何か先の尖ったもので」と傍注し、頭注には「針・楊子などであろう」と記す。ここまでは、『篋物語』の例を引きながらも、この「もの」の先が角筆であると認めたものは見られない。

平成になって、「新日本古典文学大系」(今西祐一郎氏 平元 岩波書店)は「針など尖った物の先端」と注するが、後文の「昨日の白紙」には「これによって二〇二番歌(引用者注)B歌のこと」が墨を用いぬ角筆ような物で書かれたことがわかる」と注している。そして、「岩波文庫」(今西祐一郎氏 平4 岩波書店)では「先のとがったもので。角筆か(小林芳規)」と注する。そして、「新編日本古典文学全集」(木村正中・伊牟田経久氏・平7)では、「角筆らしい何かの先で」と訳し、頭注には「角筆(文字をさすためなどに使う、先の尖った筆様の具)に炭粉などをつけて書いた、とする説に従う。文字が細く紙全体が白く見える」と記す。平成になると、小林芳規先生の『角筆文献の国語学的研究』(昭62 汲古書院)や中公新書『角筆のみちびく世界』(平元 中央公論社)に示された見解の普及・浸透によって、次第に「もの」の先が角筆であろうと認められるようになってきたわけである。

『新編全集』が角筆に炭粉などをつけて書いたとする説に従うというのは、喜多義勇氏が『日本古典全書』に「木片のさきを細く削って焼いたもの」と記したのと関係があり、これはD歌の「たちまのや

ぐ、ひのあと」に「焼く杭」を掛けるとする説に基づく(喜多氏は戦前の『蜻蛉日記講義』(昭12 武蔵野書院 以来一貫してこの説を採られている)。小林先生も、「焼く杭」によって、木片の先端を削って焼いたとしても、炭迹は僅かに付着する程度であったであろうから、結果としては凹みが残り、後日炭粉が飛んで無くなれば凹みだけとなり、「一見白紙紙のように映ることになる」と説かれて「焼く杭」掛詞説を容認され、角筆の先端に炭粉を付けて書いたと考えられる角筆文献の実例を挙げておられるから、『新編全集』はその説に従ったものと思われる。

ところが、初二句にまたがって「焼く杭」を掛けたとする説は、楠本契氏『蜻蛉日記全注釈』下巻(昭41 角川書店)によって否定されているのである。楠本氏は、

①「焼く杭」という語はありそうになく、その意を表わすには「燃え杭」が使われ、『和名抄』などにも出ている、

②『解環補遺』に「ヤキスミニテ書ニハララジ、針アルイハ楊子ナドヤウノ物モテ筋ヲ書タルニテ紙ハ白キナメリ」といい、それと相前後して成ったらしい五十嵐篤好の『かげろふ解環旅寝』(中略)にも「杭の事也、やき墨にてかけるにはあらず、くひのさきにて紙にきづつけてかきたる也、墨などはみえず、たゞ白紙なる事、此歌にてしるべし」というのが正しく、それがゆえに下の句が成り立つのであり、燃えさして書いたのなら、下の句を解する際、「今日見れば字が消えてあとかたもなくな

「ついで」という意を補わなくては落ち着かないが、実はその要はないのである、

の二項を挙げて「焼く杭」説を否定し、炭粉を付けることなく尖つたものの先端で書いたと解かれた。納得のいく見解である。「大和だつ人」が「ものの先して」返歌を書いたのは、その筆跡に「蜘蛛のかくいと」をイメージさせたものである。炭粉などを使つては光の具合で見えたり見えなかつたりする蜘蛛の糸の白く細い筋とは似ても似つかぬものになるし、わざわざ「ものの先」を使う意味がない。筆者の角筆文献発掘調査の経験から言つても、角筆で書かれた線は、まるで蜘蛛の糸のごとく見えにくいものである。光の当て方によつてやつと見えてくる。これこそ蜘蛛の糸のさまに合致するのである。「昨日の白紙」とあるのは、女の手紙がもともと普通に見ただけでは白紙にしか見えないものであつたからであつて、一晩のうちに炭粉が飛び散つて見えなくなつたというふうなものではないだろう。

「燃え杭」の語は確かに『和名抄』巻第十二・燈火部第十九（二十巻本）に見え、「燼」左傳注云燼音燼火餘木也とある。これは語義に記す通り燃え残りの木のことであるから、角筆の先に炭粉を付けたものでももちろんないし、「木片のさきを細く削つて焼いたもの」でもない。「焼く杭」なる語は語法上成り立たないと思うが、もし故意に焼いたものなら「焼き杭」とでも言うであらうか。しかしそのような語はない。「焼け杭」の語ならあり、『金剛般若経集驗記平安初期点』に見えるが、「燼」の字を訓じたもので、「燃え杭」と同義

である（『日本国語大辞典』）。「ものの先」はおそらく角筆で、炭粉などは付けずにあたかも蜘蛛の糸のごとき細い凹み文字で和歌を書いたのに相違ない。角筆を「ものの先」と言つたのは、「沢にももの摘む女わらはべ」「ものなどものするほどに」「ものへなむ」など、『蜻蛉日記』に頻出する醜化表現のひとつであらうが、角筆が女性である作者道綱母にはなじみの薄い道具であつたためでもあらう。『篁物語』にも見られた通り、角筆は主に男性貴族が漢籍訓読を行なう際に用いるものであつた。道綱母がその名称を知らなかつたわけではなからうが、女性の身ではつきり書くのは憚られ、何か尖つたものと言つておくのが無難と判断したのであらう。「大和だつ人」は、父か兄かの持ち物であつた角筆を使つて和歌を書いたのであらう。

三 『蜻蛉日記』和歌の本文校訂試案

ところで、『蜻蛉日記』のこの場面に載る和歌については、従来の解釈にいくつかの疑問点がある。それはテキスト自体の問題とも絡むので、以下、それに関して私見を提出したい。

まず、「大和だつ人」が角筆で書いてきたB歌に対する道綱の返歌Cである。改めて引用する。

つゆにても命かけたる蜘蛛のいにあらし風をば誰か防かむ

『新編全集』の現代語訳には、「どんなにはかなくても、蜘蛛が命を託している巢に吹く荒い風を、誰が防ぎましょう。命をかけて思うあなたの手紙を、私は決して散らしてはしませんよ」とあり、「新大

系」の訳には、「露で命をつなく蜘蛛の巣に吹きつける強風は誰も防ぎはしない(が、あなたの手紙は風がふいても飛び散って人目につかぬよう、私が配慮する)」とある。「つゆ」が蜘蛛の命のはかなさというところか、蜘蛛が命をつなく糧とする草の露と取るかで初二句の解釈は異なるが、以下はだいたい同じである。女が「風吹けば空に乱るものと知る知る」と詠んで、自筆で返歌などしたらたちまち世間に広まって浮名が流れてしまいうだろうと心配したので、道綱は、蜘蛛の巣が空に乱れるような荒い風を防ぐのは自分だけだ、自分は噂が広まらないように防いでやるから心配無用と太鼓判を押したと解するわけである。

贈答の流れから言えばそうなるのだろうが、下の句の「あらし風をば誰か防かむ」がやや言葉足らずの感がある。直訳すれば「荒い風を誰か防ぐだろうか」の意であり、反語表現であろうから「誰も防ぎはしない」の意になる。誰も防がないのではまずいから、「私以外の」誰がふせぎましょう(「集成」のように「私以外の」を補ったり、「新大系」のように逆接で繋いで意味を補って解釈したりしなければならぬ)。これで道綱の思は正確に相手に伝わるのであろうか。「誰も防ぎはしない」と突き放した歌と取られかねないのではなかるうか。

思うに、これは『蜻蛉日記』の本文に問題があるのであって、この歌の末句「たれかふせかむ」は、「たれかふかせむ」の誤写なのでないかと思う。もしそうならば「あらし風をば誰か吹かせむ」となつて、

いったい誰が荒い風を吹かせたりしようか、もちろん自分は吹かせはしない、の意になる。いや、たとえ風が吹こうとしても、自分は決して吹かせたりはしないということを強調した表現と取るべきであろう。女の歌に「風吹けば」とあつたのを承けた歌だから、「防かむ」よりも「吹かせむ」の方が掛け合いとしてもふさわしいのである。この箇所は諸本異同がないようだが、信頼すべき古写本が伝わらない『蜻蛉日記』の伝本状況を考えれば、現存諸本の共通祖本以前に「ふかせむ」が「ふせかむ」に誤写された可能性がないとは言えない。さて、この道綱の歌に対しては、女は「暗し」(日が暮れて暗くなった)と言って返歌がなかった。翌日、道綱は、昨日の女がよこした白紙の歌を思い出してD歌を詠んで遣る。これも改めて引く。

たちまのやくぐひの跡を今日見れば雪の白浜白くては見し

「たちまのやくぐひの跡」とは、諸注が説く通り、垂仁紀にある鳥取道の起源譚による表現で、但馬で鶴(白鳥)を捕らえた故事から「但馬のや鶴」と言い、筆跡を「鳥の跡」と言うことから女の手紙の筆跡を「鶴の跡」と言った。「雪の白浜」は、『古今六帖』第二・くに・一二七四に「たじまなるゆきのしらはまもろよせにおもひしものを人のとやみん」(第三・はま・一九二〇にも重出。第三句「もろよせに」と)とあり、『能因歌枕』(広本)「国々の所々名」に、但馬国に「雪のしらはま」と見え、『和歌初学抄』「所名」には「ゆきのしら濱」とある但馬国の歌枕である。「たじまのやくぐひの跡」に「焼く杭」を掛けるという説を柿本獎氏が否定されたことは前述したが、柿本氏

は「杭」を掛けるという見解は採っておられる。しかし、その必要もないであろう(最近の注では「岩波文庫」のみが「杭」の掛詞を認める)。

この歌の解釈は、「新編全集」の訳によれば、「やつといたいたお手紙を今日見ますと、但馬の雪の白浜に鶴がおりたつたも同然、まつ白でした。こんどは、ぜひ御筆跡を拜見したいものです」となる。「白い紙にももの先して書かれた女の筆跡を、雪の白浜に降り立つた白鳥の足跡に例えて何も見えないと恨んだという理解で、諸注概ね同様の解釈である。が、やや落ち着かないのは、「今日見れば……白くては見し」という呼応である。「今日見れば」という明らかに現在の視点が、「白くては見し」という過去の時制と合致していない。白紙に見えたのは手紙を受け取った昨日からのことだから過去で言ったかとも思うが、それではわざわざ「今日見れば」という必要はない。訳文の「今日見ますと……まつ白でした」という言い方では、今日見てはじめて真白であることに気付いた趣になるが、それなら「白くては見し」ではなく、「白くてありけり」とでもあるべきだろう。

実際、万葉以来、和歌で「今日見れば」とあると、「……けり」と、いわゆる気付きの助動詞「けり」で呼応するのが普通なのである。いくつか例を挙げる。

○みなひとのこふるみよしのけふみればけうへもこひけりやまかは

きよみ(『万葉集』巻七・雑歌・一一三五)

○ものもふとこもらひをりてけふみればかすがのやまはいろづき

にけり(『万葉集』巻十・秋雑歌・二二〇三)

○をしのすむきみがこのしまけふみればあしびのはなもさきにけ

るかも(『万葉集』巻二十・四五三五)

○みたえせしこまのあらいそけふみればおひざりしくさおひにけ

るかな(『家持集』一八七)

○きのふみし花のかほとてけふみればねてこそさらに色まさりけ

れ(『兼輔集』二七)

○春立ちて風や吹くとてけふみれば滝のみをより玉ぞ散りける

(『貫之集』二八〇)

○ふたたびや紅葉ばはちるけふみればあじろにこそは落ちはてに

けれ(『貫之集』三三二)

○けふみれば鏡に雪ぞふりにける老のしるべは雪にや有るらん

(『貫之集』八四〇)

○ふりにけるなたえせぬをけふみればむかしながらのはしにぞ

ありける(『能宣集』四六七)

○けふ見れば玉のうてなもなかりけりあやめの草のいほりのみし

て(『拾遺集』巻二・夏・一一〇・よみ人しらす)

○神なびのみむろの山をけふみればした草かけて色づきにけり

(『拾遺集』巻三・秋・一八八・曾禰好忠)

(※引用および歌番号はすべて『新編国歌大観』による)

これらの用法の実態に即すれば、D歌にも「今日見れば……けり」

の呼応を想定すべきではなからうか。そうだとすれば、「今日みれ

ば雪の白浜(なりけり)と補つて詠むべきで、四句切れの歌と解するのがよいであろう。すなわち、「(但馬のや)鶴の跡(あなたから昨日いただいたお手紙の筆跡)を改めて(今日見ると、まるで雪の白浜(に降りた鶴の跡のように真白)なのでした)」の意となる。そして、末句の「白くては見じ」は、実は、「白くては見じ」と読むべきであつて、「これからはこんなに真白な状態では見たくありません」の意になり、諸注が補つて訳している意に近くなるのである。従来「見じ」と読まれていたところを「見じ」と打消意志に読むことによつて、違和感のあつた時制の齟齬も解消されるわけである。

この歌の末尾を「見じ」と読む説は、すでに今西祐一郎氏の「新大系」が採つておられる(『岩波文庫』も同様)。ただ、「新大系」の訳は「雪の白浜の鶴の足跡のような白一面の昨日の手紙は読めない(炭で書いた手紙がほしい)とあり、「見じ」を「読めない」と不可能の意に解しておられるようであるが、助動詞「し」の用法としては無理がある。しかしながら、従来定着していた読みを覆して「見じ」と読まれたのは、まことに慧眼であると思う。

おわりに

よく知られた平安朝文学の中で、角筆が使用された場面と認められる二例を取り上げて、本文の読解・校訂に関して私見を提出してみた。必ずしも角筆使用の実態に関する考察というわけではなく、筆者の関心の赴くままに論を進めてしまったので、いささか羊頭狗

肉になつてしまった感がある。とは言え、乏しいながらも角筆文献発掘調査に従事した経験を通じて得られた実感に基づいた部分も少なくない。

今のところ角筆文献の発掘は、国語学的事象の研究対象とされるに留まつているくらいがあるが、当然さまざまな文化史的研究の対象となり得る可能性を孕んでいる。国文学研究の分野に關しても、いろいろと新しい知見を与えてくれるものである。すでに、個人蔵の伝冷泉為相筆『伊勢物語』に角筆による注釈の書き入れがあることが報告されているし、冷泉家の歌書からは角筆の合点を有する写本が発見されている。また、新潟大学蔵佐野文庫の近世版本には、『伊勢物語』『今昔物語集』等の文学書に角筆の書き入れがあることも判明している。今後の角筆文献判読研究の進展が待たれるところである。

(付記) 本稿は、第十回角筆研究会(平成九年八月十一日、

於広島女学院大学)でのシンポジウム「角筆文献発掘調査の視点」において口頭発表した内容の一部をもとにして成稿としたものである。なお、本研究は、平成九年度文部省科学研究費補助金基盤研究(B)(1)「西日本各地を対象とする角筆文献発掘調査研究と角筆文字解読機器の開発研究」(研究代表者・徳島文理大学教授 小林芳規)の一環をなすものである。

——せのお・よしのぶ、広島大学文学部助教——